

# 国語科学習指導案

指導者 浜岡恵子

**日時** 平成24年12月1日(土) 第1校時(10:00~10:50)  
**年組** 中学校第2学年1組 計40名(男子20名, 女子20名)  
**場所** 中学校第2学年1組教室  
**単元** 『百人一首』 一歌に込めた思いに迫る一

## 単元について

今回の教材である『百人一首』は、鎌倉時代、藤原定家が勅撰和歌集の中から、一人一首ずつ秀歌を選んで屏風に仕立てたものが、後に秀歌集として読み継がれたものである。江戸時代以降、「歌カルタ」として普及した経緯もあり、古典の中でも、日本人にとって特に親しみ深い作品の一つと言えるだろう。昔から正月に家族でカルタ取りをして楽しんだり、近年では小学校で『五色百人一首』に取り組みられたりと、どこかで『百人一首』に出会った経験をもつ人は多い。しかし、その経験の多くは和歌を暗唱することであり、古今和歌集や新古今和歌集から選ばれた歌のうち数首を除けば、和歌の内容そのものに目を向ける学習は少なかった。『百人一首』=「歌カルタ」として親しまれてきた経緯が、学校においても「現状では百人一首とカルタは、その場限りのトピック的なものであり、国語科の学習として十分認識されていない」(菊川, 2006) ことの一因として挙げられるのである。しかし、四季の移り変わりや美しい自然の風景、人を愛する気持ちなど、五・七・五・七・七の定型に込めた作者の心情に寄り添いながら鑑賞することは、和歌の楽しみ方として欠かせないものである。和歌百首を一度に読むとすれば、少なくない量ではあるが、他の和歌集と比較すると、けっして多くはなく、一個の作品としてまとめて扱うのに可能な教材であると考えられる。また、これまで古典の指導は、「読むこと」の領域の指導事項として扱われることが多かったが、今回の学習指導要領の改訂にともない、古典の指導においても「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のそれぞれにおいて言語活動が十分行われるような教材選定が求められている。その点でも『百人一首』は、「カルタ遊び」を出発点にしてさまざまなアプローチが考えやすい教材と言えよう。

本校第2学年生徒は、昨年度、Ⅱ期の古典学習において「名句を味わう」として、俳句の鑑賞を行っている。松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶という江戸時代を代表する有名な俳人の作品と、教師が用意した偽物の作品を比較することで、どちらが本物の作品か見極める学習を行った。その結果、定型のリズムや語の意味、語感、構成といった点に着目して鑑賞し、その句ならではの良さに気づくことに一定の成果がみられた。しかし、その一方で中学1年生の段階では、作品を読む場合に自分の身に引きよせて読むことが難しい現状も課題としてみられた。その要因の一つとして生活経験の乏しさが作品世界への共感を阻んでいるとも考えられる。ただ、自分自身の生活経験がなければ文学作品を味わえないというわけではない。それを補い読むための知識と想像力を育む必要性を感じた。

そこで、今年度の古典学習では、『百人一首』の和歌を鑑賞することに取り組みさせる。和歌は、俳句と同様、限られた言葉の中にさまざまな技法を用いて、広く深い世界を表現する定型詩である。また、一人称の文学とも言われ、作者の視点から描かれた情景を読むのに適している。そこで、今回、和歌を読むための手立てとして、和歌の技法である「掛詞」に着目することと、和歌に添えられた「詞書」を作者からの情報として読むことを学習に取り入れる。さまざまな技法がある中で、特に「掛詞」に注目させるのは、「掛詞こそ和歌のレトリックの中心になるもの」(渡部, 2009) とも言われるように、一語に2つの意味

をもたせたり、2つのストーリーをも作ったりすることができる技法だからである。ものや風景に自分のあり方や心情を重ねて表現するこの技法を、読むための知識としてⅢ期の生徒達が獲得することで、見えてくる世界が広がり、鑑賞を深めることができる。また、作者の置かれた状況を知り、心情を想像するために、和歌とともに詞書を読み、それらを手がかりにして歌日記を書く活動を設定する。ここで言う歌日記とは、生徒は作者になりきり、選んだ和歌を詠んだ経緯を日記風にしたものを指す。日記というスタイルをとることにより、「一人称で書くこと」「和歌や詞書にある言葉や事柄を、作者が置かれた状況として想像すること」が容易になると考えたからである。和歌を読む最初の段階として、作者に同化し、作者の思いに寄り添うことで、和歌の言葉に表れた部分と言葉には表されていない部分をつなぐことができるよう指導したい。そのような段階を経た後に、生徒は和歌の読み手自身に戻って、作者に同化した先程の自分と自己内対話を行いながら鑑賞を行う。和歌の中の既知と未知、表出された言葉とその言葉の奥に込められた意味に目を向けた鑑賞ができるよう指導していきたい。

### 指導目標

『百人一首』の和歌とその詞書をもとに、歌日記を書くことを通して得た作者の想いを、自分の鑑賞に活かすことができるようにする。

### 指導計画

1. 「百人一首を楽しむ方法」の一つとして、和歌の読み方を学ぶ  
…………… 5時間(本時はその4時間目)
2. 「百人一首」から自分が関心をもった和歌を選び、鑑賞文を書く  
…………… 1時間

### 本時の目標

和歌の作者として書いた歌日記を交流することを通して、和歌の読みに新たな視点が加わり、読みを深めることができる。

### 「学びのつながり」の視点

鑑賞するために必要な知識や情報を集めたり、その情報を根拠としながら想像力をふくらませたりすることで、和歌の言葉に表現されたもの(=目に見えるもの)から言外に表現されたもの(=目に見えない意味や情感)に気づき味わうことが実感できれば、「伝統的な言語文化」としての和歌に進んでかわり、親しむ姿が見られるようになるだろう。

### 学習の展開

学習活動と内容	指導上の留意点 (◆評価)
<p>1. 目標の把握と準備 (10分)</p> <p>□前時の学習を想起し、本時の学習目標と学習方法を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一人ずつ自分の好きな和歌を朗詠する。</li> <li>・前時に取り上げた和歌(「吹くからに…」「わびぬれば…」の二首)について内容を復習し、本日の学習方法を確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○本日の学習の中でロールプレイがしやすくなるよう、しっかり声を出させて生徒の緊張をほぐす。</li> <li>○学習の見通しをもつことができるようにする。</li> </ul>

歌日記を交流することで、作者が和歌に込めた思いに迫ろう。

## 2. 目標達成に向けた活動（30分）

A 24 この度は幣もとりあへず手向山  
紅葉の錦神のまにまに  
菅家

- ワークシートで和歌の意味を確認し、朗詠する。
- 歌日記を披露する。

- 和歌に込められた意味について、作者に扮した生徒に質疑・応答をする。

B 60 大江山いくのの道の遠ければ  
まだ文も見ず天橋立  
小式部内侍

- ワークシートで和歌の意味を確認し、朗詠する。
- 歌日記を披露する。

- 和歌に込められた意味について、作者に扮した生徒に質疑・応答をする。

## 3. 目標に対する評価（10分）

- 今回取り上げた和歌について、交流によって理解が深まった点について書く。

- 作者になった生徒に続いて、しっかり声を出して斉読するよう促す。

- 歌日記に、次のような内容が押さえられているか確認する。

- ・場面（季節、時間、風景）
- ・心情
- ・表現技法（掛詞など）

- 和歌の読みを深めるための質問になるよう指導する。

- 和歌の作者として質問に答えること確認する。

- 作者になった生徒に続いて、しっかり声を出して斉読するよう促す。

- 歌日記に、次のような内容が押さえられているか確認する。

- ・場面（季節、時間、風景）
- ・心情
- ・表現技法（掛詞など）

- 和歌の読みを深めるための質問になるよう指導する。

- 和歌の作者として質問に答えること確認する。

- ◆交流によって、新たに気づいたことや読みが深まったことが書けているか。【読むこと】

## 参考文献

菊川恵三 『和歌山大学教育学部紀要 教育科学 第56集』

小町谷輝彦 『小倉百人一首』 文英堂 2000.

渡部泰明 『和歌とは何か』 岩波書店 2009.